インタビュー③

一人でも多くの人に漆の素晴らしさを伝えたい

漆芸家／人間国宝 **室瀬和美**

縄文時代から続く日本の漆文化の歴史と伝統を継承しつつも、卓越した技法と斬新なデザインに絶えず挑戦し、人々を魅了し続けてきた漆芸家・室瀬和美氏。漆とともに五十年以上歩んできた室瀬氏が語る、漆との出逢い、師の教え、そして漆の素晴らしさ――。

蒔絵螺鈿硯箱「椿」を前に
（縦24.5、横17.3、高4.6センチ／2005年制作）

海外に受け継がれる日本の漆文化

――二〇一七年五月にはスペインに行かれたと伺いました。国内のみならず海外でも大変なご活躍です。

室瀬 私は日本で漆、特に蒔絵の作品をつくってきましたが、日本人は西洋の人とはまた違った美の求め方をしています。

ですから、漆のよさとか、作品の見方、それをとおした日本人の感覚とか、そういうところの理解を海外の方にもう少し広げていきたいと思っていましてね。以前から海外には出ていたんですが、アメリカやイギリス、スペインなど、最近は特に海外への発信の機会が増えつつあります。

――スペインなどでも、日本の漆文化への関心は高いのですか。

室瀬 ええ。私も最初は、スペインと日本の漆文化が直接繋がっているとはイメージできなかったんですけど、いわゆる十六世紀の安土桃山時代に、日本の漆工芸が世界に出て行ったきっかけというのは、やはり、ポルトガルやスペインとの交易なんです。

その時代に注文を受けて日本でつくられたものが、いまだに向こうには残っていて、漆文化に興味のある方が結構いるんですね。

あと、これは思わぬことだったんですが、バルセロナの美術大学に漆を教えるコースがあるというので、えーっと思って、昨年行ってみたんですよ。そしたら日本人の先生ではなくて、スペイン人がスペイン人に漆を教えている。

――それは意外ですね。

室瀬 どこから漆の技法が伝わってきたのか聞いてみると、明治時代に日本人がパリに行って漆工芸を教えていたんですね。その時に学んだパリの作家の工房に、バルセロナの作家が手伝いに来て技を身につけ、バルセロナにも二次的に広がっていったんだと。

それで漆の話や技法についてレクチャーしたのですが、大学の卒業生たちが、「再来年に漆の技法が伝わって百年になるので、これをきっかけに漆の作家協会をつくりたい」と言ってくれましてね。

今年の五月にまた呼ばれて行ったわけですけど、ちゃんと日本の技法を踏襲して、ものすごく熱心に作品をつくっていましたよ。

――日本人が知らないところで漆文化が広がっているんですね。

室瀬 彼らは漆について知りたいことが山ほどありますから、これからも技法だけではなく、日本人の考え方・価値観というか、漆文化そのものを継続的に伝えていくことで、海外の人に日本のことを理解してもらう、すごくいいきっかけになっていくと思います。

自分が漆を継ぐ最後の人間になる

――室瀬さんが漆の道に入ったきっかけをお教えください。

室瀬 それはやっぱり、父親（室瀬春二）が漆芸家だったということがきっかけですね。しかも父の場合には自宅の一室が仕事場だったこともあって、生まれた時から日常生活の中に漆があるのが当たり前だったんです。

――漆が空気のように身近に。

室瀬 ただ、父の仕事がどういうものなのか考え始めた時期は、もうちょっと後のことで、転機となったのは中学二年の時でした。

当時、父が大病を患い三年ほど寝込んでしまったんですね。それで、ようやく回復して展覧会に作品を出品しようという時に、まだまだ体力が十分ではないということで、私が磨きなど作品の仕上げの手伝いをしたんです。それが父の作品を手伝った最初でした。

少し手伝っただけでも、自分が携わった作品が展覧会の会場に並ぶというのは初めての経験じゃないですか。いまだにその情景を覚えているんですが、自分にとってはすごく印象的で、「あっ、こういう仕事って面白いな」と思ったんですね。そこから、漆という存在が自分の中に興味として、ぐぐっと入ってきた。

――お父様はどんな方でしたか。

室瀬 もう淡々とした性格で、何があっても動じず、焦らない。父に怒られたことは一度もないくらい(笑)。なぜかというと、父のように展覧会に出品する作家は、自分が感じたものを作品の中に込めていくので、怒ったり、悲しんだりといった状況がそのまま作品に移るんですよ。ですから、平素から平穏な状況をつくっていく心掛けが大事になってくるんです。

また、日本の工芸品は、相手の人が日常生活で使って心地よくなってもらいたい、喜んでもらいたいという気持ちでつくりますから、つくり手自身も、だんだんそのような性格、体質になっていく。

――漆が体質をつくると。

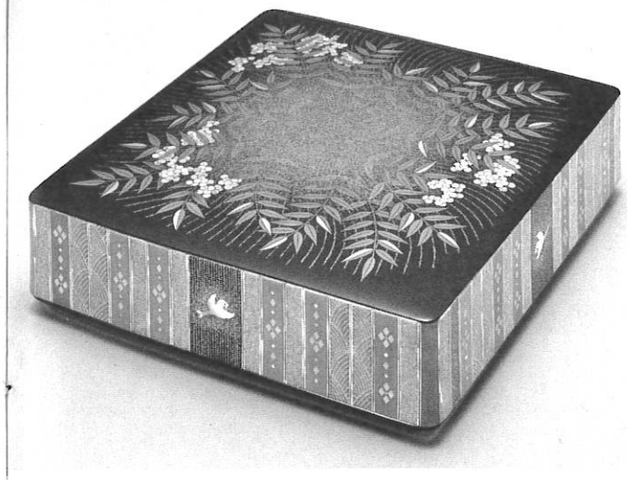
室瀬 まあ、父の場合は先天的だったのかもしれませんが、私は若い時にはせっかちだったり、気が短かったりしたのが、漆の仕事を続けるうちに、だんだん平穏な体質になっていきましたね(笑)。

ですから、父は仕事には厳しい人でしたけど、「ああしろ」「こうしろ」というようなことは、絶対に言いませんでした。「自分の跡を継げ」とも一切言わなかった。

――あぁ、そうなんですか。

室瀬 というのも、作家の生活は収入が不安定なので、上から強制的に継がせても、結局は長く続かないんですね。自分で覚悟しない限り選べる仕事ではないし、そういう意味でも、父は継げとは一切

むろせ・かずみ――昭和25年東京都生まれ。父は漆芸家の室瀬春二。51年東京藝術大学大学院美術研究科漆芸専攻修了。国内外の展覧会に作品を発表するとともに、漆芸文化財保存に携わり、金比羅宮天井画復元、琉球古楽器復元等において失われた技法の復活に務め、正倉院宝物の分析でも功績を残す。平成20年重要無形文化財保持者（蒔絵）認定、紫綬褒章受章。『漆の文化』（角川選書）『室瀬和美作品集』（新潮社図書編集室）などの著書がある。



室瀬氏が2004年に制作した蒔絵螺鈿箱「朱光」
（縦25.8、横23.9、高7.2センチ）

言わなかったのだと思います。

私もその頃、「漆工芸は確かに好きだけど、職業にしたら生活できるだろうか」と、随分迷っていました。歴史が好きだったので学校の先生もいいなと思ったし、当時はちょうど日本が新しい時代に入っていく高度経済成長期でしたから、進路指導の先生からも「これから漆なんて消えていくよ」などとさんざん言われていました。

――それでも、あえて漆の道に進まれたのはなぜですか。

室瀬 逆に、周囲からそう言われると、「もし消えるなら、自分がその消える最後の人間になってもいい」くらいに思いましてね。高校二年の時に「漆の仕事をやりたい」と、父に初めて相談しました。

そしたら父の答えは至ってシンプルで、「自分次第だ」と。もうそのひと言しか返ってこない。それで私も「あぁ、自分次第か」と思って、最後は自分の意志で漆工芸の道に進むことを決めたんです。

創作者に必要な三つの「学び方」

――その後は、どのように漆の道を歩んでいかれたのですか。

室瀬 父に「技術は家でも教えられるから、大学で歴史や他の分野の仕事も広く学ぶべきだ」と勧められたこともあって、高校卒業後は東京藝術大学に進みました。

それで、学生時代に学んだ先生の中で一番刺激的だったのは、やはり、父の師匠でもあった蒔絵の人間国宝、松田権六（ごんろく）先生です。

当時、松田先生は七十歳代でしたが、私のような十七、十八歳の若者に、歴史や日本文化など漆に関するあらゆることを数時間にわたって延々と繰り返しお話しくださって、もうびっくりしました。

――いまでも印象に残っている松田先生の教えはありますか。

室瀬 教えは本当にいっぱいありましたけど、特に私が後進に伝えているのは、ものをつくる作家として生きていくために必要な「三つの学び方」のお話です。

松田先生がおっしゃるには、学び方には三つの段階があって、まず第一段階は「人から教わる」ことだと。学校の先生や先輩、職人であれば師匠から直接教わる。

そして第二段階は、「ものから教わる」。だいたいの人が、「先生から学んで、勉強になりました」で終わってしまうけれども、実はその教えてくれた先生も一世代前の人に教わったことを伝えてくれているわけだから、せいぜい、三代前くらいの技術しか教われない。

ただ、例えば漆工芸では、千年前につくられた作品がいまなお腐らずに残っている。その千年前の技術や、途中で途絶えてしまった仕事を教えてくれるのは、人ではなく、作品そのものがいろいろな情報を出してくれるんだよと。

――千年前の作品が教えてくれる。

室瀬 ただ、「ものから教わる」といっても、ものが喋（しゃべ）ってくれるわけではないですから、学生の私には全然ピンときませんでした。

それが少しずつ分かり始めたのは、後に松田先生の直接のお弟子さんで、文化財の修復にも取り組まれた田口善国先生に師事した時でしたね。田口先生が全国各地に連れていってくださって、「この作品はこう見るんだ」と、手取り足取り教えてくださったんです。

田口先生がおっしゃっていたのは、修復する技術があれば、もっと長くその作品を残すことができる。つくった人の気持ちを考えると、直すこともつくることと同じくらい大事だ。だから一つ自分の作品をつくったら、一つ昔のものを直してあげなさいと（笑）。

――貴重な経験と学びでしたね。

室瀬 そして、最後の第三段階の学び方は、「自然から学ぶ」。人やものから学ぶことは　あくまで先人や既に形あるものから教わることであって、自ら作品を創り出していくことには繋がらないと。

要するに松田先生は、木々や風や日光など、四季折々に変化する自然から生まれるエネルギーをキャッチし、それを自分の表現にどう生かしていくかが、創作者として最も大事だと言うんですね。

そして、平安、鎌倉、江戸時代の人も、それぞれ皆その時代に感じたものを表現しているのであって、彼らの真似をしてもしょうがない。君はいま生きている時代に感じたものを表現するんだと。

――とても深い教えです。

室瀬 松田先生には創作者としての心構えを、田口先生にはその実践を教えていただき、私は本当に師に恵まれたと感謝しています。

呼吸や脈拍までコントロールする漆の技法

――漆工芸の技術は、どのように身につけていかれたのですか。

室瀬 例えば、蒔絵の技術で言うと、細い線を描くことがある意味、究極の技術なんですね。

蒔絵では、装飾する面に漆を使って線を引き、その上に金粉を蒔いて模様にしていくのですが、金粉がつくと、どうしても線が太くなりますし、柔らかい漆だと漆の線の幅が広がってしまいます。

ですから、堅い漆を調合し、細い蒔絵筆を使って、ゆっくりしたスピードで、置くように細くて背の高い線を描いていく。さらに筆先には、呼吸や脈拍の影響も出てしまうので、息をしているか、していないか、分からないくらいの呼吸法が必要になるんですね。

――その線の描き方や呼吸法は誰かに教わるものなのですか。

室瀬 これは自分で体得する以外にありません。私も十センチの線を引くのに、何百本とひたすら地道な練習を続けました。この技術が漆芸家としての一生を決めていくようなものですから、若い時に疎（うと）かにすると後でどうにも身につかない。最近、伝統工芸をやる若者が少なくなっているのも、そこの我慢の段階に耐えられないということがあるんでしょうね。

――そうした鍛錬を重ねる中で転機となった作品はありますか。

室瀬 やはり、展覧会で初めて受賞した作品というのは、自分にとって印象深いものがありますね。

――詳しくお教えください。

室瀬 制作のきっかけは、一九八四年の六月、ある機会に北海道を訪れたことでした。その時に、地平線の向こうまで緩やかな起伏で広がる麦畑に、風が吹き、麦の穂が靡（なび）いて、畑の色が様々に移り変わっていく光景を見たんです。

その強い印象が忘れられず、制作したのが「麦穂」という作品で、それが一九八五年の第三十二回日本伝統工芸展にて「日本工芸会奨励賞」をいただいたんです。作家として作品をつくり始めてから十年目頃、三十五歳の時でした。

松田先生の「自然から学ぶ」ではないですが、自分が自然から受けた感性が世間に認められたことを初めて肌で感じましたし、「麦穂」には、自分がそれまで学んできた様々な技法を織り交ぜていたこともあって、「これで自分は一生作家として生きていくんだ」という覚悟が定まったんですね。

――それまでは、ご自身の作品に自信がなかったと。

室瀬 そうですね。特に二十代なんて、「自分は漆を続けていく才能があるんだろうか」と、いつも思っていました。というのも、私は同世代の作品ではなく、常に松田先生や田口先生など、ものすごいレベルの作品と無意識に比較していたんですね。そうすると、もう劣等感しかないわけですよ（笑）。

ただ、得体の知れない、到達点が見えないレベルを目標にしていたことが、結果的に、私にとってはよかったのかなと思います。

努力し続けられる人が一流になっていく

――室瀬さんは後進の育成にも取り組まれていますが、一流になる人と二流で終わってしまう人の差はどこにあると思われますか。

室瀬 それはどの分野にも言えるかと思いますが、努力し続けること以外にないと思います。私も作家になって最初の十年は、本当に大変でしたし、初めから才能があって、思うようにできる人なんてほとんどいません。ですから、その苦しみを超えて努力し続けられること、それがある意味、才能ですよね。努力を重ねる能力のある人が一流になっていくんです。

――あぁ、努力の継続が大事。

室瀬 それに関連して、「途中で投げ出さない」ということも、特に漆工芸においては大事ですね。

例えば、陶芸などでは焼き上がった器を「これはだめだ！」といって、ガチャーンと割ることがよくありますよね。でも、漆工芸では一つひとつの作品を一年以上かけつくっていくので、簡単にガチ

新刊 人間力を高める致知の本

いつか読んでみたかった日本の名著シリーズ第16弾!!

『古事記』を千年の眠りから目覚めさせた本居宣長の学問入門書

本居宣長『うひ山ぶみ』
motoori norinaga : uiyamabumi
現代語訳：濱田浩一郎
致知出版社

全文をとことん読みやすくしました!
64分で読めます(20代30代10人平均値)

いつか読んでみたかった日本の名著シリーズ⑯

「詮ずるところ学問は、ただ年月長く倦ずおこたらずして、はげみつとむるぞ肝要」
『古事記伝』全44巻完成という大事業を成し遂げた宣長が綴った学問の入門書、ここに甦る。

学問を始める人の「聖書」的存在!
本居宣長『うひ山ぶみ』
現代語訳＝濱田浩一郎
定価＝本体1,400円＋税／四六判並製

大感謝祭 対象商品

◉勉強をするのに才能は関係ない ◉大きな志を堅持せよ
◉人から悪く言われることを恐れるな ◉後世のことからよく学んでいけ……

『致知』愛読者限定、いまだけの特別価格。セットがお得です! ◉1/31(水)まで特別価格にてご提供します

大感謝祭 セット商品

「いつか読んでみたかった日本の名著」人気セット 定価合計18,252円 ➡ 特別価格 13,600円(税込)
26%オフ・分売不可

何冊読みましたか?寒い冬こそ、家で読む「日本の名著」。

◉お求めは、本誌同封チラシまたは致知オンラインショップをご利用ください。
ご注文・お問い合わせは致知出版社 TEL03-3796-2118(直通)

致知オンライン で 検索
カード決済可

ャーンとは壊せないんですよ。

ですから、「あっ、だめだ」と思ったところから、「どうすればもう少しよくできるか」という思いを持続して、仕上がる寸前まで努力を続けていけるかどうかが大切になってくる。そのぎりぎりまで考えるという「粘り強さ」が、我われのような仕事をする人間には欠かせないんです。

一、二、三、四とステップアップして、三か四まで来た時に、「まぁ、いいや」と思ったら次もまた三か四で終わります。でも、もうひと頑張りをして、四を五にする努力をしていれば、次は五か六のレベルにまでいく。その積み重ねが仕事を成長させるんですね。

漆の仕事への出逢いが人生の一番の財産

――二〇〇八年には人間国宝に認定され、漆文化の伝統を守り伝える重責も担ってこられました。

室瀬 日本人が考える「伝統」は、既成概念としてできあがっていて、多くの方が「変わらないもの」というイメージを持たれているかと思います。英語の「Tradition」はまさにそういう意味ですが、私はそれは「伝統」ではなく「伝承」だと思っているんです。日本には「Tradition」の意味が二つある。

――「伝統」ではなく「伝承」。

室瀬 「伝承」は形や様式を変えずに伝えること、「伝統」はその時代の価値観や自然への思いといった目に見えないものを伝えていくことなんです。「伝承」は受け継ぐこと、「伝統」はそれを受け新たにつくり出すこと、とも言えます。

ですから、松田先生の教えにも通じますが、昔と同じものをつくってもしょうがない。過去の歴史や技法を全部認めた上で、いま生きている時代の新しい感覚で最先端のものをつくらなければ、未来には伝わらない。そうすることで初めて数百年後に、「平成ってこんな時代だったんだ!」と分かって、新たな伝統になっていく。

現在まで千二百年間一度も消さずに伝えられてきた比叡山延暦寺の「不滅の法灯」と同じです。それは若い僧侶たちが毎日新しい油を継ぎ足してきたから、千二百年前の灯がいまに残っている。新しい油を継ぎ足すのを忘れてしまうと、その伝灯が消えてしまう。

――いま生きている時代の価値観や考え方を絶えず作品に取り入れていくことが大事なんですね。

室瀬 その日本にしかない価値観、素晴らしさを伝えないまま、政治や経済だけで海外の人たちと付き合っても、やはり「浅い人間」だと見られてしまいます。冒頭の話に戻りますが、これからはより一層、漆をはじめとした日本の伝統文化を海外に知らせていくことが大事になってきますよ。

――まず、日本人自身が漆のよさを知らなければいけませんね。

室瀬 ええ。講演などで「家でご飯を食べる時、器は何でいただいていますか」と質問すると、皆さん当然のように「(陶磁器の)茶碗です」と言います。で、私が「茶碗はお茶を飲む碗なんです」と教えると、もうびっくりします。

古来、日本人は、熱いお茶を早く、おいしく飲んでいただくために冷めやすい陶磁器を利用し、温かいご飯をゆっくり、おいしく味わっていただくために保湿力のある漆器を活用してきたんです。

ところが、明治期以降に「漆は高くて日常では使えない」というイメージが広がり、皆安い陶磁器を選んでしまった。それまでの日本人はごく当たり前に日常的に漆を使っていましたから、これは本当に残念なことだと思います。

漆器は見た目も美しいですが、実際に触れることで日本人が受け継いできた精神性がすごく伝わってきます。一日一回漆のお椀に触れるだけでも、日本人の心は絶対豊かになっていくはずですよ。

――漆は日本人の心の豊かさにも繋がっているんですね。最後に今後の抱負をお聞かせください。

室瀬 今回は「仕事と人生」というテーマをいただきましたが、私自身、漆という素材に触れているだけで心が落ち着きますし、その漆の素晴らしさを多くの人に知ってもらいたいという思いで、いままで数十年歩んできたんですね。

そういう意味では、漆に出逢えたということ、漆の仕事に携われたということ自体が一番の喜びであって、私の人生を豊かにしてくれた一番の財産でした。まさに漆の仕事は私の人生そのものです。

これからも漆の一道を歩み続けて、私がそうだったように、一人でも多くの人に漆に触れていただき、心と人生を豊かにしてもらいたい。それが私の願いですね。